

# 「家庭の教育力」向上の視点に 関する一考察

ベネッセ教育総研主任研究員 田中 勇作

## 1. 「家庭の教育力」の充実に向けての自治体の動き

第3章2、3節で見てきたように、家庭での保護者の様々な働きかけが子どもの総合学力の育成に及ぼす影響は極めて大きく、学校での各種の指導と相まる形でその効用は更に高まっていくことが検証された。

こうしたことは今回の調査結果を待たずとも、先験的に知られてきた事実であり、第3章3節の図表3-3-9に示すように、保護者は「家庭の教育力」の役割や学校教育との連携についてしっかりと認識している。

しかし、実際の保護者の働きかけの違いやスタイルにはバラツキがあり、認識と行動との間にはかなりのギャップが存在することも事実である。平成5年の総理府広報室の調査によると実に75.1%の人が「家庭の教育機能は低下している」と答えているように、「家庭の教育力」の低下は周知の事実として認識されており、国民的な課題となって久しい(総理府広報室「青少年と家庭に関する世論調査」より)。

さて、平成8年7月の第15期中央教育審議会の第1次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の第2部第2章「これからの家庭教育の在り方」においては、「家庭教育は、乳幼児期の親子のきずなの形成に始まる家族との触れ合いを通じ、『生きる力』の基礎的な資質や能力を育成するものであり、すべての教育の出発点である」と述べられ、「家庭の教育力」の低下状況を踏まえた上で、以降の答申につながる「家庭の教育力の充実・回復」に向けての指針が示された。

また、平成14年11月の広島県生涯学習審議会答申第2章では、「子どもの社会は家庭に始まり、家庭教育は、全ての教育の原点といえる。基本的な生活習慣・生活能力、倫理観、自制心や自立心など子どもが社会化する上での基礎的な能力は、家庭教育によって最初に培われるものである」と述べ、「家庭の教育力」には「親などが子どもに対して一定の目的を持って行う意図的な教育力」と、「子どもを取り巻く人間関係や自然・社会環境を通して自然に子どもに身につく、環境による教育力」の2つの側面があり、「昨今の家庭の教育力の低下は、そうした2つの教育力の相互補完的な機能が崩れてきたことに原因がある」としている。

更に、同答申では、家庭教育の現状として、①環境による教育力の低下、②家庭教育の偏り、③父親不在の家庭教育、④情報化社会の中の家庭教育という観点から問題点を挙げており、それらに対応する形で、家庭の教育力を充実するための方策が展開されている(広島県生涯学習審議会答申「広島県における家庭の教育力を充実するための方策について」より)。

また、熊本県教育庁社会教育課が平成13年に実施した家庭教育に関する調査研究報告書では、家庭教育の実態・課題として、①家庭の教育力に限界があること、②母親に過度に依存した子育てが行われていること、③子育てや家庭教育の内容が多様で複雑な状況にあって親の不安や悩みが増大していること、④少子化の進行によって家庭や子どもを取り巻く環境が大きく変化してきていることを挙げており、そうした課題に対応していくために、以下の7つの基本的考え方の必要性を示し、家庭教育支援の具体的な施策を展開している。

- |                    |               |
|--------------------|---------------|
| 1) 家庭責任の原則         | 5) 良質な社会環境の確保 |
| 2) 子どもの発達に応じた教育の確保 | 6) 社会的支援の確保   |
| 3) 家庭の教育力の確保       | 7) あらゆる家庭への支援 |
| 4) 多様な教育力の確保       |               |

(熊本県教育庁社会教育課 平成13年度「少子高齢社会における家庭教育及び行政支援のあり方に関する調査研究」報告書より)

他の自治体においても、前述の第15期中教審答申以降、次々と出された答申(平成10年6月の「幼児期からの心の教育の在り方について」、平成12年4月の「少子化と教育について」、平成14年2月の「新しい時代における教養教育の在り方について」)等を受けて、「家庭教育の充実」についての各種施策が検討・実施されている。

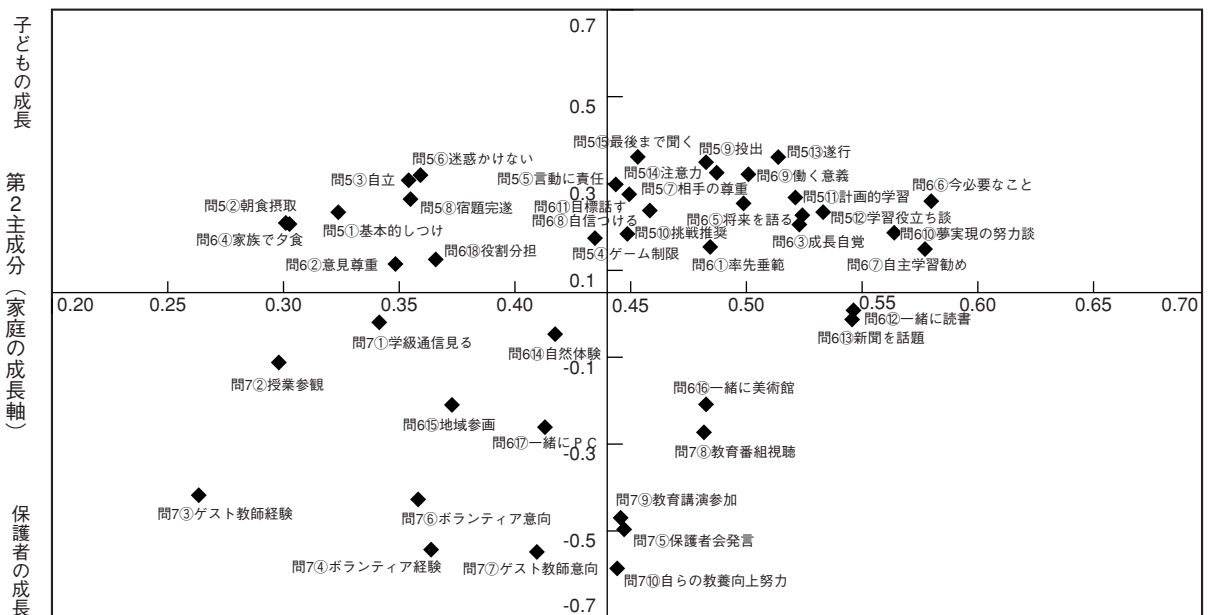
どの自治体においても、家庭の教育力の低下の理由の分析や課題意識はほぼ共通しており、その基本的な方向性は、学校・地域・社会との連携による「家庭の教育力の回復」を目指したものとなっており、各自治体ではそれぞれ工夫をこらした具体的な施策が示され、着実な成果を上げておられる事例も少なくない。

ただ、昨今の学校教育における「学力向上」への推進の機運に比べると、その動きは遅々としたものになってきている傾向が見られ、バランスのとれた「総合教育力」の向上を提言する我々からすれば残念な状況になっていることは否めない。

## 2. 「家庭の教育力向上」における視点(試案)

以上、「家庭の教育力の充実」について述べたこれまでの中教審答申の概要と、それらを踏まえた自治体の施策の方向性について見てきたが、ここで今回の「学力向上のための基本調査2004」の調査データに戻って、筆者なりの「家庭の教育力向上における視点」を示してみたい。

図表5-3-1 「家庭の教育力(DIP)」43項目の2軸によるマッピング



**図表 5-3-1** は、第3章2節で紹介した「家庭の教育力(DIP)」に関する43項目について、主成分分析を行い、第1主成分負荷量を横軸、第2主成分負荷量を縦軸にプロットしたものである。

主成分分析についての詳しい説明は割愛するが、簡単に言うと、多数ある要因を合成して、いくつかの成分にし、その総合力や特性を求める方法である。例えば、複数の生徒の国語・数学・理科・社会・英語の5つの成績データから、この5つの要因を合成し、1つの成分のデータにすることによりその生徒の総合力を調べたり、2つの成分から文系能力や理系能力といった観点を設定し、各能力の高さを調べたりする時に用いられる。

なお、この図表では便宜的に43項目の第1、2主成分の各負荷量の平均値(第1主成分：0.44、第2主成分：0.05)で直交する2本の直線を引き、4つの象限に分けることで、各項目の特性を視覚的に捉えられるようにしている。

さて、ここで、2つの主成分がそれぞれ何を示すのかについて見ていくことにする。まずは、横軸の第1主成分であるが、負荷量が大きな右側に位置する項目を見ると、「問6⑥将来の夢の実現のために、今どんなことをするのが大切なのかいっしょに考えるようにしている」「問6⑩自分の子どものころの夢や、その実現のためにがんばった話を聞かせることがある」、「問6⑦興味・関心のあることを自分で調べたり、勉強するようにすすめている」「問6⑤子どもから将来の夢や目標について話をよく聞いている」といったような項目に代表されるように、子どもの将来を見据え、自らの将来を切り開いていくことを支援しようというような働きかけが多く見受けられ、保護者の意識としては「子どもの未来の在り方」に対する関心がより強く見られると言える。

一方、左側に位置する項目は、「問5②朝食は毎日しっかり食べるように言っている」「問5①早寝早起きなど、規則正しい生活をするように言っている」「問5③食器の後片付けなど、自分のことは自分でするように言っている」「問7②授業参観には毎回参加するようにしている」といったような項目に代表されるように、子どもの今の状況を踏まえ、基本的な生活習慣をしつれたり、子どもの現状を確認するというような働きかけが多く見られ、保護者の意識としては「子どもの今の姿」により関心が強い項目と考えられる。

さて、前述の第15期中教審第1次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」でも述べられているように、「家庭教育は、『生きる力』の基礎的な資質や能力を育成するものであり、すべての教育の出発点である。」とあり、第一義的な変量となる第1主成分は、「生きる力」を意味していることはほぼ間違いないであろう。

更に、上で見てきたように、右側は「子どもの未来の在り方」を、左側は「子どもの今の姿」をそれぞれ意識した項目となっており、右側は「未来に生きる力」、左側は「今に生きる力」と言い換えることで、横軸の第1主成分は「生きる力の方向軸」と命名できるのではないかと考える。

余談になるが、「今の家庭は、家族の過去・現在・未来を共有できなくなっている」というようなことばで現在の家庭の教育力の低下を論じたある新聞記事を目にしたことがある。

核家族化等によって子育ての知識や経験の乏しい保護者が増えたり、昔からの「知恵」や「家族の歴史」といったことが伝承されなくなっており、そこでは「家族の過去」が共有されることは少ない。

また、「ホテル家族」と言われるように、家族の生活スタイルの変容や個別化により、家族のコミュニケーションは乏しく、家族一人ひとりの抱える現状さえも共有されることは少ない。

そして、将来に対する閉塞感は家族で「将来」を語り合い、夢の実現に向けて支え合っていくこともままならない、そんな状況に陥りつつある我が国の家庭であるが故に、「家庭の教育力の充実」が強く望まれているのではないだろうか。

「生きる力の方向軸」という命名は、この「家族の過去・現在・未来の共有」という概念からも、妥当性のある

ものとなっているのではないかと考えている。

次に、縦軸の第2主成分について見てみると、上側に位置する項目が主に「子どもの成長(社会化)」を企図した働きかけである一方、下側に位置する項目は、子どもへの働きかけを通して、保護者自身が成長したり、保護者自身の学びへの参画に関わるものとなっていることが分かる。

前述の広島県生涯学習審議会答申等の中にも、「これからの生涯学習社会においては、親子が家庭という場で共に学び合い、共感し合う「学習家族」となっていくことが求められている」という一節が見られ、子どもの成長だけでなく、子育てを通して保護者自身も成長していくという観点に立てば、第2主成分は「家庭の成長軸」と命名できるのではないだろうか。

以上の2軸の特性から、各象限を命名すると右上の第Ⅰ象限は「子どもの未来に生きる力の向上」、左上の第Ⅱ象限は「子どもの今を生きる力の向上」、左下の第Ⅲ象限は「保護者の今を生きる力の向上」、そして右下の第Ⅳ象限は「保護者の未来に生きる力の向上」になると考えられる。

図表5-3-2は、先の図表5-3-1をもとに、今述べた各象限における代表的な項目を各5項目抽出し、各項目に対する小学生保護者および中学生保護者の肯定率(「とてもあてはまる」および「まああてはまる」と回答した保護者の割合)を示している。

図表5-3-2 「家庭の教育力(DIP)」に関する項目の4類型

Ⅱ	子どもの今を生きる力の向上	子どもの未来に生きる力の向上	Ⅰ
<p style="text-align: center;">〈第Ⅱ象限の代表的項目〉</p> <p>問5②「朝食は毎日しっかり食べるように言っている。」 (肯定率 小;96.8%、中;93.4%)</p> <p>問6④「できるだけ家族そろって夕食をとれるようにしている。」 (肯定率 小;82.5%、中;79.8%)</p> <p>問5①「早寝早起きなど、規則正しい生活をするように言っている。」 (肯定率 小;91.4%、中;86.1%)</p> <p>問5③「食器の後片付けなど、自分のことは自分でするように言っている。」 (肯定率 小;88.9%、中;82.3%)</p> <p>問5⑥「他の人に迷惑がかかることをしないように言っている。」 (肯定率 小;99.3%、中;93.9%)</p>		<p style="text-align: center;">〈第Ⅰ象限の代表的項目〉</p> <p>問6⑥「将来の夢の実現のために、今どんなことをすることが大切なのか一緒に考えるようにしている。」(肯定率 小;63.0%、中;76.2%)</p> <p>問6⑦「興味・関心のあることを自分で調べたり、勉強するようにすすめている。」(肯定率 小;74.6%、中;72.3%)</p> <p>問6⑩「自分の子どものころの夢や、その実現のためにがんばった話を聞かせたことがある。」(肯定率 小;58.2%、中;59.3%)</p> <p>問5⑫「学校で習ったことが社会に出て役立つ話を聞かせたことがある。」(肯定率 小;62.4%、中;62.1%)</p> <p>問6⑤「子どもから将来の夢や目標について話をよく聞いている。」(肯定率 小;68.3%、中;71.0%)</p>	
<p style="text-align: center;">〈第Ⅲ象限の代表的項目〉</p> <p>問7③「ゲストティーチャーとして授業に協力したことがある。」 (肯定率 小;7.3%、中;4.5%)</p> <p>問7②「授業参観には毎回参加するようにしている。」 (肯定率 小;86.1%、中;83.9%)</p> <p>問7④「授業の手伝いをするボランティアとして参加したことがある。」 (肯定率 小;26.0%、中;12.2%)</p> <p>問7⑥「授業の手伝いをするボランティアをやりたいと思う。」 (肯定率 小;30.0%、中;20.0%)</p> <p>問6⑮「地域の行事や活動にできるだけ子どもも参加するようにしている。」 (肯定率 小;67.4%、中;55.1%)</p>		<p style="text-align: center;">〈第Ⅳ象限の代表的項目〉</p> <p>問7⑩「教養を身に付けたり資格を取るために学習や習い事をしている。」 (肯定率 小;31.7%、中;32.1%)</p> <p>問6⑫「子どもといっしょに本を読んだり、読んだ本の感想を話し合ったりしている。」(肯定率 小;44.5%、中;33.2%)</p> <p>問6⑬「新聞に書かれていることについて、子どもとよく話をする。」 (肯定率 小;45.0%、中;49.2%)</p> <p>問7⑤「保護者会やPTA総会で、学校への希望や意見を発言するようにしている。」(肯定率 小;19.9%、中;16.5%)</p> <p>問7⑨「教育に関する講演会などにはできるだけ参加するようにしている。」 (肯定率 小;24.5%、中;31.7%)</p>	
Ⅲ	保護者の今を生きる力の向上	保護者の未来に生きる力の向上	Ⅳ

なお、各象限における代表的な項目の抽出に当たっては、図表5-3-1にプロットした各項目の第1主成分および第2主成分の負荷量の座標と便宜的な原点座標(横軸0.44、縦軸0.05)間の距離を算出し、各象限で

距離の大きな順に5項目を抽出した。

	小学校	中学校
第Ⅰ象限平均	65.3%	68.2%
第Ⅱ象限平均	91.8%	87.1%
第Ⅲ象限平均	43.7%	33.6%
第Ⅳ象限平均	32.8%	30.1%

ここで、各象限における代表5項目についての保護者の肯定割合の平均スコアを算出すると左表のようになり、象限によるバラツキが認められた。

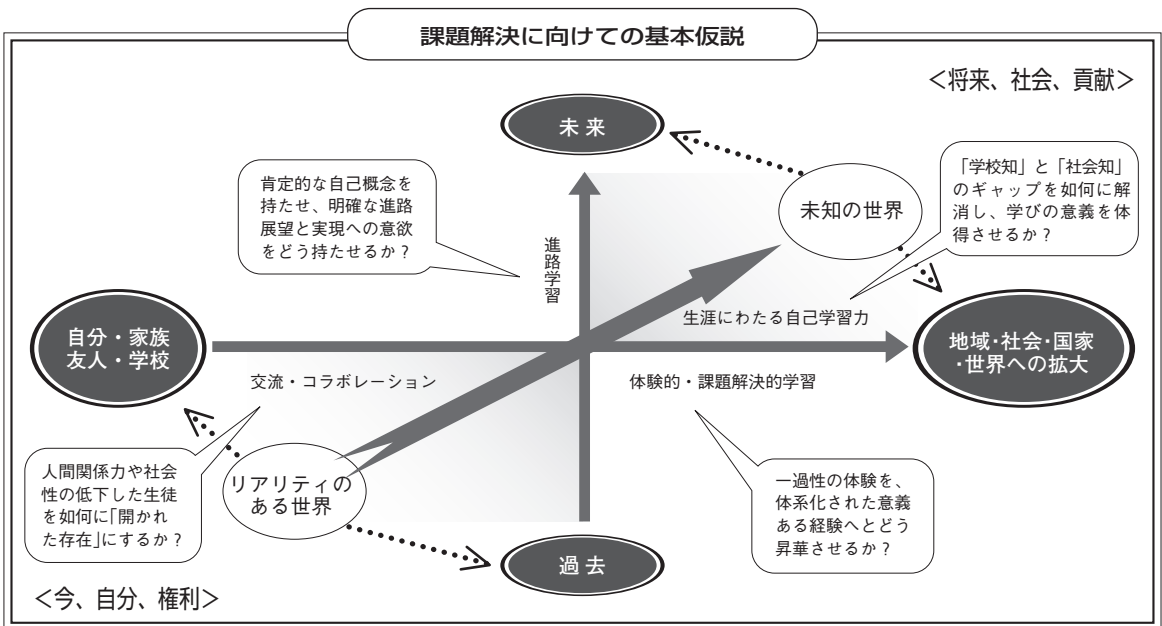
左表から明らかなように、小・中学校の保護者共に最も肯定割合が高いのは第Ⅱ象限となり、逆に第Ⅳ象限で肯定割合は最も低くなる。

言い換えると、「子どもの今の生きる力の向上」に関わる第Ⅱ象限の項目に対しては、ほとんどの保護者がなんらかの働きかけをしている一方、「保護者の未来の生きる力の向上」に関しては3割程度の保護者が肯定しているに過ぎないということになる。

つまり、この図式から見る限り、現在の家庭の教育力が発揮されている焦点は「子どもの今」にあり、「保護者自身の成長」や「未来に生きる力の向上」という領域に向かうベクトルは決して強くはなく、ここに家庭教育の抱える課題とその解決に向けての方向性が見出せるのではないだろうか。

さて、少々古くなって恐縮であるが、**図表 5-3-3**は、平成11年に、国立教育政策研究所の工藤文三先生に監修をいただき、当時先導的に「総合的な学習」に取り組んでおられた高等学校の先生方と行った共同研究の成果をまとめた報告書『課題解決力の育成を目指す教育』（2001年、ベネッセ文教総研編）に掲載した「高校現場の抱える教育課題解決に向けての基本仮説」を示した概念図である。

**図表 5-3-3 高校現場の抱える教育課題解決に向けての基本仮説**



ここで、同報告書第7章(筆者執筆)の記述を引用すると、「今の中・高校生においては、『今・自分・権利』といったキーワードに代表される『たこつぼ』の中で、人間関係や規範意識が欠如した中で、学びの意義を見出せず、自分や将来の夢というものを見出せないまま生きている。しかし、これからの社会で求められる『生きる力』とは、その対極にある『将来・社会・貢献』がキーワードとなり、未来への明確な展望と共に、社会や世界への積極的な関与・参画が求められ、『たこつぼ』状態から如何に生徒を解き放つかが、中学・高校現場における大きな課題になっている。」ということで、この状況は恐らく現在でもあてはまると考える。

そして、「左下の象限の『たこつぼ状態(図ではリアリティのある世界)』にある生徒を、過去(現在)から未来へとつながる『時間軸(縦軸)』に沿って展開する『進路学習・キャリア教育』と、自分や身の回りの事象から地域・社会・世界へと拡大する『空間軸(横軸)』に沿って展開する『体験的・課題解決的学習』の2つの側面から構成される総合的な学習の取り組みを通して、未来や社会・世界といった「未知の世界」へと導くことができる」という基本仮説を示した。

この基本仮説は、元来、高等学校における「総合的な学習」の構築に関する一つのモデルとして、ベネッセ教育総研所長高田正規が提唱したものであるが、縦軸は、自らの生き方・在り方を探る「自己認識の深化軸」であり、縦軸は、自分を取り巻く社会や時代を探る「社会認識の拡大軸」であり、それらの合成ベクトルは「生きる力」や「学びの基礎力」の育成に重なり、今回「総合学力研究会」として提唱する「総合教育力」が担う「子どもの総合学力」育成の構図においても適用できるのではないだろうか。

前述のように、残念ながら、現在の家庭教育の焦点は「子どもの今を生きる力の向上」に偏っており、子どもの社会化にも少なからず悪影響を及ぼしていると言える。しかし、学校教育におけるこうした「自己認識の深化」「社会認識の拡大」の取り組みに関しても、第3章3節で検証した事実を踏まえれば、家庭教育との相互連携によってよりその効用は高まることが推察できる。

学校教育でなされる「自己認識の深化」や「社会認識の拡大」の取り組みを通して身につけた知識や技能、経験は、現実の社会や生活、人生の中で具体的に生かされるという子どもの活動によって、本当の力となるのではないだろうか。そうした子どもの活動を支え、フォローし、人生の先輩としてアドバイスする、更に、それを通して保護者自身も成長していくという構図を如何に作り上げていくかが「家庭の教育力充実」を考える上で不可欠な視点であろう。

様々な要因から、昨今の家庭の状況や事情は文字通り千差万別であり、その価値観も多様となり、「家庭の教育力充実」に向けてのアプローチは、子どもに対するそれよりも恐らく困難であろう。しかし、それを避けて通ることは、これまでの、そしてこれからの「子どもの総合学力の向上」に対する取り組みの成果を「一時的」なものにしてしまう恐れが多分にある。

「特効薬的なアプローチ」というのは恐らくないのであるが、まずは、子どもの、学校の、そして保護者の実態や抱える課題を客観的なデータに基づき、子どもの育成に関わる全ての者が共有化し、互いの問題意識を明らかにするといった地道なアプローチこそが求められているのではないか。

### 3. 「家庭の教育力」の自己点検ワークシートの提案

最後に、そのアプローチにおいて、「家庭の教育力」の状況を保護者自身がセルフチェックし、今後の働きかけの一つのヒントとして生かしていただけるように、第3章2節での知見ならびに、前述の2.で示した「家庭の教育力向上」の視点を元に作成した「家庭の教育力セルフチェックシート(仮称)」を試案として掲載した。(資料1、2)

このワークシートは、第3章2節で紹介した「家庭の教育力(D I P)」の尺度構成に用いた15項目をベースに、図表5-3-2に示した「生きる力の方向軸」および「家庭の成長軸」によって分類された4つの領域の考え方を導入し、保護者自身が家庭の教育力の状況を自己点検し、その特徴をつかむとともに、今後充実していくことがのぞまれる領域を示すことをねらいとしている。

構成としては、保護者によるセルフチェックを行う「質問紙」部分と、家庭の教育力の状況や特徴を示す「リーダーチャート」部分、および今後の充実に向けてのポイントを解説する「解説」部分の3要素を考えているが、最後の「解説」部分については力不足もあり、本報告書では十分に紹介できる状態にまで至らず、今後の課題として残った。

先生方のご意見やご指導をもとに、今後より精緻化し、それぞれの学校における「総合教育力」向上の取り組みに少しでも貢献していけるものにしていきたい。

## 「家庭の教育力に関するチェックリスト」

このプリントは、あなたのご家庭における教育的な働きかけがどのような傾向・特徴を持っているかを発見していただくためのチェックリストです。

各項目において、「正解（こうあるべきもの）」というものはありません。ありのままの状況をお答えください。

□あなたの家庭でのお子様へのしつけや教育、および、あなた自身についてお答えください。

①～⑳のそれぞれについて、右の1～4の中から一つ選んで○をつけてください。

- |   | とても<br>あてはまる | まあ<br>あてはまる | あまり<br>あてはまらない | まったく<br>あてはまらない |
|---|--------------|-------------|----------------|-----------------|
| ① テレビを見る時間やゲームをする時間を制限している。                         | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ② 約束したことや自分の言動に責任を持つように言っている。                       | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ③ 早寝早起きなど、規則正しい生活をするように言っている。                       | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ④ 他の人に迷惑がかかることをしないように言っている。                         | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑤ 食器の後片付けなど、自分のことは自分でするように言っている。                    | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| -----   |              |             |                |                 |
| ⑥ 将来の夢の実現のために、今どんなことをすることが大切なのか<br>いっしょに考えるようにしている。 | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑦ 子どものよいところをできるだけ認めて自信を持たせるようにしている。                 | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑧ 学校で習ったことが社会に出て役立つ話を聞かせたことがある。                     | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑨ 子どもから将来の夢や目標について話をよく聞いている。                        | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑩ 興味・関心のあることを自分で調べたり、勉強したりするようにすすめている。              | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| -----   |              |             |                |                 |
| ⑪ 学校通信や学級通信にはいつも目を通すようにしている。                        | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑫ 授業参観には毎回参加するようにしている。                              | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑬ 授業の手伝いをするボランティアをやりたいと思う。                          | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑭ 地域の行事や活動にできるだけ子どもと参加するようにしている。                    | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑮ ゲスト・ティーチャーとして授業に参加したことがある。                        | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| -----   |              |             |                |                 |
| ⑯ 子どもといっしょに本を読んだり、読んだ本の感想を話し合ったりしている。               | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑰ 新聞に書かれていることについて、子どもとよく話をする。                       | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑱ 子どもといっしょに、美術館や博物館に行ったことがある。                       | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑲ 教育に関する講演会などにはできるだけ参加するようにしている。                    | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |
| ⑳ 教養を身に付けたり資格を取るために学習や習い事をしている。                     | 4            | — 3         | — 2            | — 1             |

## 「家庭の教育力」自己点検ワークシート

- あなたのご家庭における教育的働きかけにはどのような特徴があるでしょうか？  
以下の手順に沿って、点検して見ましょう。

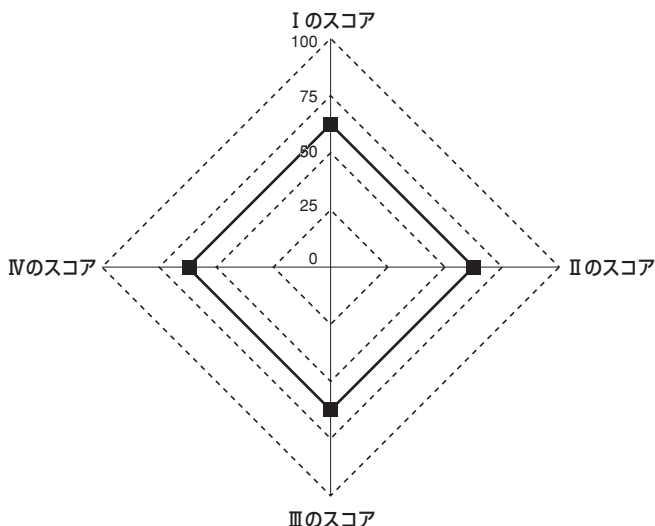
〈手順〉

- 1) 「家庭の教育力に関するチェックリスト」の回答番号を右表A部に転記してください。
- 2) 各列の小計を計算して、右表B部に記入してください。
- 3) 各列のスコアを下記の算式で計算して、右表C部に記入してください。

スコア＝小計×5 ※スコアは25～100の範囲になります。

- 4) 右表C部の各列のスコアを下記のレーダーチャートの線上にプロットしてください。

	I		II		III		IV	
	No.	回答番号	No.	回答番号	No.	回答番号	No.	回答番号
A	①		⑥		⑪		⑱	
	②		⑦		⑫		⑲	
	③		⑧		⑬		⑳	
	④		⑨		⑭			
	⑤		⑩		⑮			
B	小計		小計		小計		小計	
C	スコア		スコア		スコア		スコア	



〈レーダーチャートの作り方〉

- ①まず、上表「I」のCのスコアを上縦線上にプロットします。仮にスコアが70であれば、目盛りの50から75の間に、目分量で構いませんので、点を打ちます。
- ②次に、上表「II」のCのスコアを右の横線上にプロットします。一番内側の目盛りは25、次が50、75を表わし、一番外側が100となっていますので、①と同様に点を打ちます。
- ③以下同様に、「III」「IV」のスコアをプロットします。
- ④最後に4つの点を結びます。

※左図の実線は、肯定的回答と否定的回答の中間を示す基準を意味します。

- 5) 出来上がったレーダーチャートを以下の観点から点検し、ご家庭での働きかけの特徴や傾向を見てみましょう。

- ①「I」のスコア：お子様に対する「基本的な生活習慣定着への働きかけ」の度合い  
一般に、子どもの学年が上がるほどスコアは低くなる傾向がありますが、家庭教育の原点といえる重要な働きかけです。
- ②「II」のスコア：お子様の将来設計に関わる「自分探しへの働きかけ」の度合い  
「I」とは逆に、一般に学年が上がるほどスコアは高くなる傾向があり、人生の先輩として、子どもの将来の夢の実現や自らの生き方・在り方といったことを共に考え、支援することを通して、学びの意義や働くことの大切さを理解させる上で家庭に期待されている重要な働きかけです。
- ③「III」のスコア：保護者の「学校教育に対する参加・関心」の度合い  
一般に、学年が上がるほどスコアは低くなる傾向がありますが、学校と家庭の連携が強く求められる現在、学校教育の現状や課題を知り、家庭に何が求められているのか、また、保護者として何ができるのかを知り、「共育」を実践していく上での重要な要素です。
- ④「IV」のスコア：保護者自身の「学習参画」の度合い  
「生涯学習社会」と言われるこれからの時代に心豊かに生きて行くためにも、誰もが「学習者」であることが求められています。また、「子どもは親の背中を見て育つ」というように保護者の学ぶ姿勢に子どもは励まされ、学びの意義を実感する上で極めて重要な意味を持ちます。

※それぞれの家庭の状況や方針は異なっており、「何点以上ないとだめ」とか、「何点以上だから問題なし」といった絶対的な基準はありません。ただ、実線の枠内に全ての点が入ってしまったり、ある特定領域スコアのみが突出したようなチャートになるようであれば、何かしらの課題が潜んでいる可能性があります。これを機に、これまでの家庭での働きかけや子どもの反応なども振り返り、我が家の教育について家族で話し合ってみてはいかがでしょうか。